

■研究プロジェクト名			
日本大学の自校史教育における教育担当者養成の実践的研究 －建学の精神の実現をめざして－			
【研究の特色・ポイント】			
<ul style="list-style-type: none"> ●「自校史教育担当者養成プログラム」という全9回程度の研修内容(講義・ワークショップなど)を策定したこと ●上記プログラムの実施は教員と職員がほぼ同人数参加し受講したこと(2年間で26人中、教員14名・職員12名) ●受講終了後、授業・オリエンテーション・父母会等で、たちまち受講の成果を発表した受講者が数名あったこと ●本学の各学部では、自校史教育担当者が定年や人事異動に左右されず、安定的に自前で確保できたこと 			
【研究の背景】			
近年、各大学や学校では自校史教育が学生生徒自身のアイデンティティーを確認する意味でも見直されて実施されている。同時に、それは当該大学における教育の特色ともなっている。本学においても、以前は学祖(学校創立に深く関与した人物)山田顕義の研究者や『日本大学百年史』の執筆者が一定数はいたが定年等の事情で、現在は非常に手薄である。この後継者不足の解消と、一人でも多く自校史の語りべを増やすことを目的として、それには教員だけでなく職員も一緒に養成すべきであるという理念をもって発足したのが本研究プロジェクトである。			
【研究成果の概要】			
研究期間	平成 24年度	～	平成26 年度
			研究費総交付額
			5,843,000
			円
(1)「自校史教育担当者養成ユニットプログラム」内容の策定			
本研究プロジェクトの成否は、ひとえに「担当者養成ユニットプログラム」と称した具体的な研修内容にかかっているわけで、約1年間をかけて検討を重ねて全9回のプログラムそのものを策定し得たことは成果の一つである。具体的には①学祖の事績および教育構想に関する講義、②学祖の著述の輪読と解説、③学祖関係写真の提供データを使用した教材作成ワークショップ、④作成したパワポ資料を使用した受講者による個別プレゼンと分担者による講評、が学祖理解の前半プログラム、⑤日本大学史の講義Ⅰ(明治・大正期)、⑥日本大学史の講義Ⅱ(文系・理系・医歯薬系)、⑦建学の精神に関する文言の変遷史の勉強会、⑧日本大学関係写真の提供データを使用した教材作成ワークショップ、⑨作成したパワポ資料を使用した受講者による個別プレゼンと分担者による講評と修了証書の授与、が後半のプログラムで、月1回で約1年間のコースである。ただし、このプログラム内容については、今後も修正改善を加えてさらに良いものにしてゆく余地は若干ある。			
(2)「自校史教育担当者養成ユニットプログラム」受講者の成果			
上記プログラムの受講者は平成25年度(3名)・同26年度(23名)の計26名(教員14名・職員12名)で、受講終了後、教員の場合は本学の初年次科目「自主創造の基礎Ⅰ」や新入生オリエンテーション、さらに職員の場合は学生父母会や新入職員研修などで、学生、父母、新人職員などに対して研修で得た知識や作成パワポ資料を活用して成果を早速発表し披露していて、これの成果は経年的に継続してゆくだろう。			
また、本学の正付属校(11校)・特準校(14校)についても、3回程度の情報交換会を開催し、それぞれ各校の自校史教育の現況を確認した上で、同プログラムの一部(写真データを提供して自分でパワポ資料を作成するワークショップ)を実施し、全25校は作成後の自校紹介の成果プレゼンを、プロジェクトの内部ではあるがおこなっている。付属各校は今後経年的にこれを活用してゆく意味において、本プロジェクトの成果と言えるだろう。			
要約すれば、自校史教育における大学各学部および正付属校や特準校の中・高各校を含めたオール日大としての共通ベースを持って足並みを揃えることに関して、各人のパワポ資料(一種のテキスト)の作成成果もあるが、それ以上に、資料を活用してこなすことが出来る人材を養成した意味において、かなりの程度で効果があり成果も挙がったということである。これに加えて各学部ごとに自校史教育の担当者を確保できたことも成果の一つである。			
(3)学祖および日本大学関係写真データのデジタル化			
本プログラムの実施遂行にあたっては、受講者各人に提供するための学祖関係写真と日本大学各学部関係の戦前から近年までの写真データは必須材料である。そこで本プロジェクトは大学史編纂課移管の広報部撮影写真(紙焼き)、約14,000枚以上のデジタル化作業を初年度から開始し、若干の未作業部分はあるが、一枚毎の目録付きデジタル化作業の大半を完了した。この膨大な画像データはPCを使用すれば、いつでも、だれでも、非常に簡単に利用できるようになったという利便性の点で有意義であり、日本大学にとっても大きな成果だと言えるだろう。			
【研究成果の意義・効果】			
本研究プロジェクトの適切かつ充実した「担当者養成ユニットプログラム」研修の受講後は教員は学生を対象に、職員は各種イベント等において、教員職員の区別なく自校史を語ることができ、先学の運営努力に敬意を持つ意味での意義を有する。			
換言すれば、これによって本学の各学部が自校史・自学部史教育の担当者将来に向けて安定的に自前で確保できる点、また、大学における学生教育の点で有意義であるばかりでなく、教職員自身の本学に対する意識改革にも役立ち、向上意欲を喚起することに効果があり、寄与するところ大である。			